



松子海山天



五



七葉のぬのたぐり
 細ききしに都を出る
 ぬののこねはみちの
 ぬののこねはみちの
 ぬののこねはみちの
 ぬののこねはみちの

十一

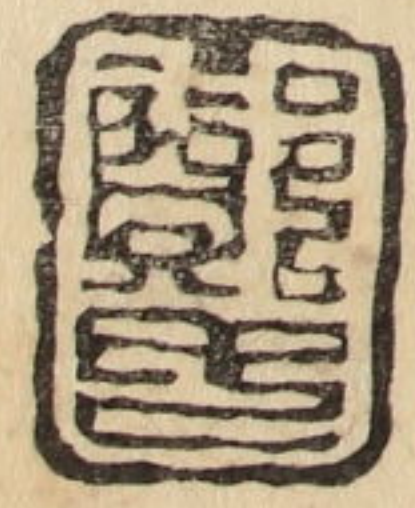
此成法すす
尋ね向いあひ
もとと一さう中
満洒たふ骨格を
一と一山家集
花藉ありし改ありと

素半、平日も七もの小枝
一もぬらたは江都
の香雪交山その
中一のゆき屋を想
一とと一山家集
一とと一山家集

畫亦如心之推尚也
畫亦如心之推尚也
畫亦如心之推尚也
畫亦如心之推尚也
畫亦如心之推尚也
畫亦如心之推尚也
畫亦如心之推尚也
畫亦如心之推尚也

戊寅春

松平貞一



月日はる代のま客よりく行くも事も又旅人也舟の
 上の生涯をうの馬の白とくく老成むうまのハ
 日く旅よりして旅を拙とく古人も多く旅も死せるあり
 予といつれの母よりの字はまの風よきまといれく漂泊ハハロクのさひ
 やまの海濱よきまといれく去の秋にたれ破をよ城の古
 葉よはらひてや、まの香よきまといれく白川に
 舞よきまといれく神の物よきまといれく心よきまといれく祖
 神のまのまよきまといれく船のまといれく川の破に
 つらまの終つてくまといれく里よきまといれく松の月先

ヤコブ



香雪


杉風別荘



心よかゝりて住む方ハ人ヲ譲リ杉風の別墅ヲ移るよ

子代戸も傾替る代もむねの家

面ハ白と皮の柱ヲ無産活せし末の七日吸合のそそ
朧くや〜月ハ在りて光おさるる物〜ふ二の
岸幽よる〜上野谷舟のふれ指又いつ〜
むつま〜たのきりハ膏より〜舟に〜
い〜船と〜余こ〜
て幻の〜
り春や〜魚の目〜

り春や〜魚の目〜

をぞ矢之の〜行〜
ふま〜
元禄〜
〜
め〜
日早加〜
る物〜
木の前〜
さ〜



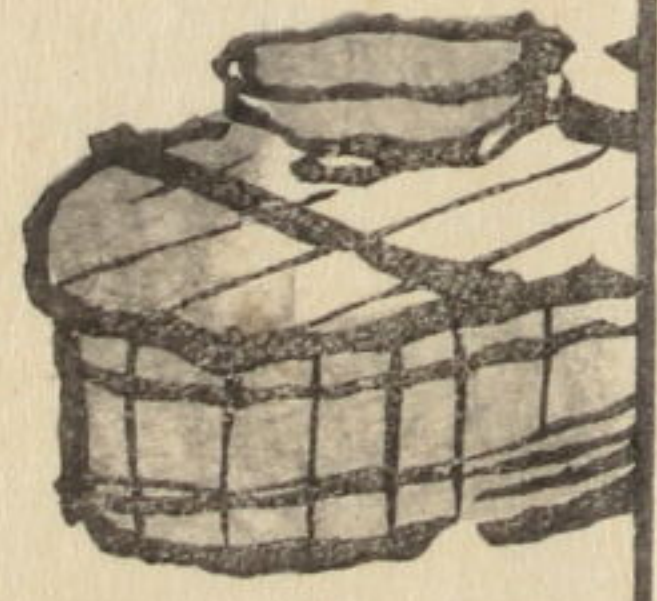
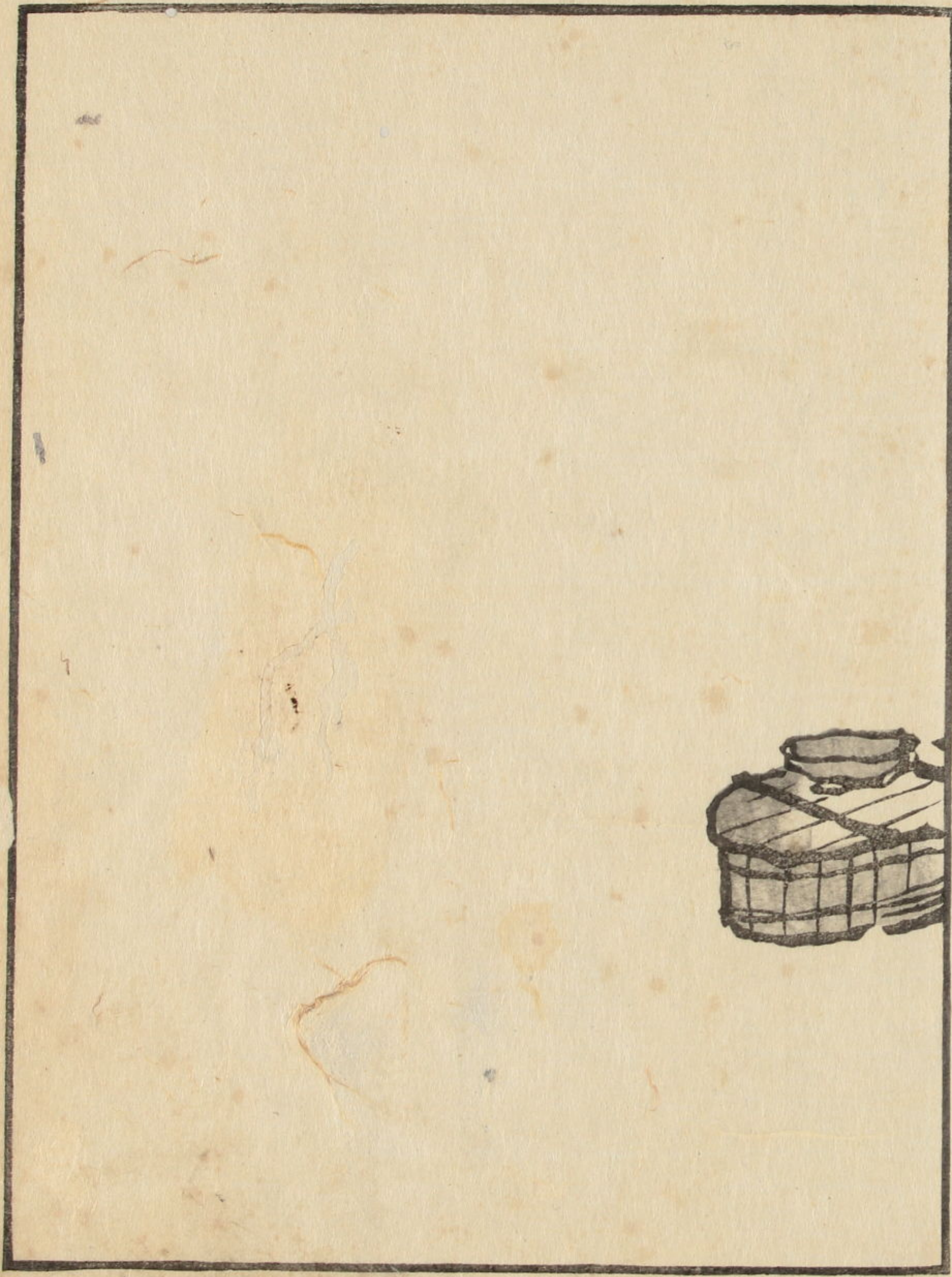
つわねのまじ

室のいほみほも同行曾らに司の神はまはつひか
姫の神もくも三舞也無人室はく枝はまはつひ
のみ中よ火くお見のこくもまはつひか
中又強を後習一はつひの謂也將このまはつひか
林も縁記の旨せよはつひか

廿日日光の禁の治のまはつひかのまはつひか
たつひかまはつひかまはつひか
まはつひかまはつひかまはつひか
まはつひかまはつひかまはつひか

示現くくの家業門の乞食服礼をまの命をたき
あつひかまはつひかのまはつひか
唯無智まふおまて正直偏固の者也剛毅本訥の
仁よまはつひかまはつひか

卯月朔日師山は諸師をば若此法山よ二荒山や
書くをて海大師開基の村日光と及まふ未
来まはつひかまはつひか
は八荒よあつひか四民あ坊の栖穩あり
まはつひか



佛
五
在
步
り



土

あゝきうけ青葉あきしの日かえ

愚候山八歳くわくまゝいまゝ白

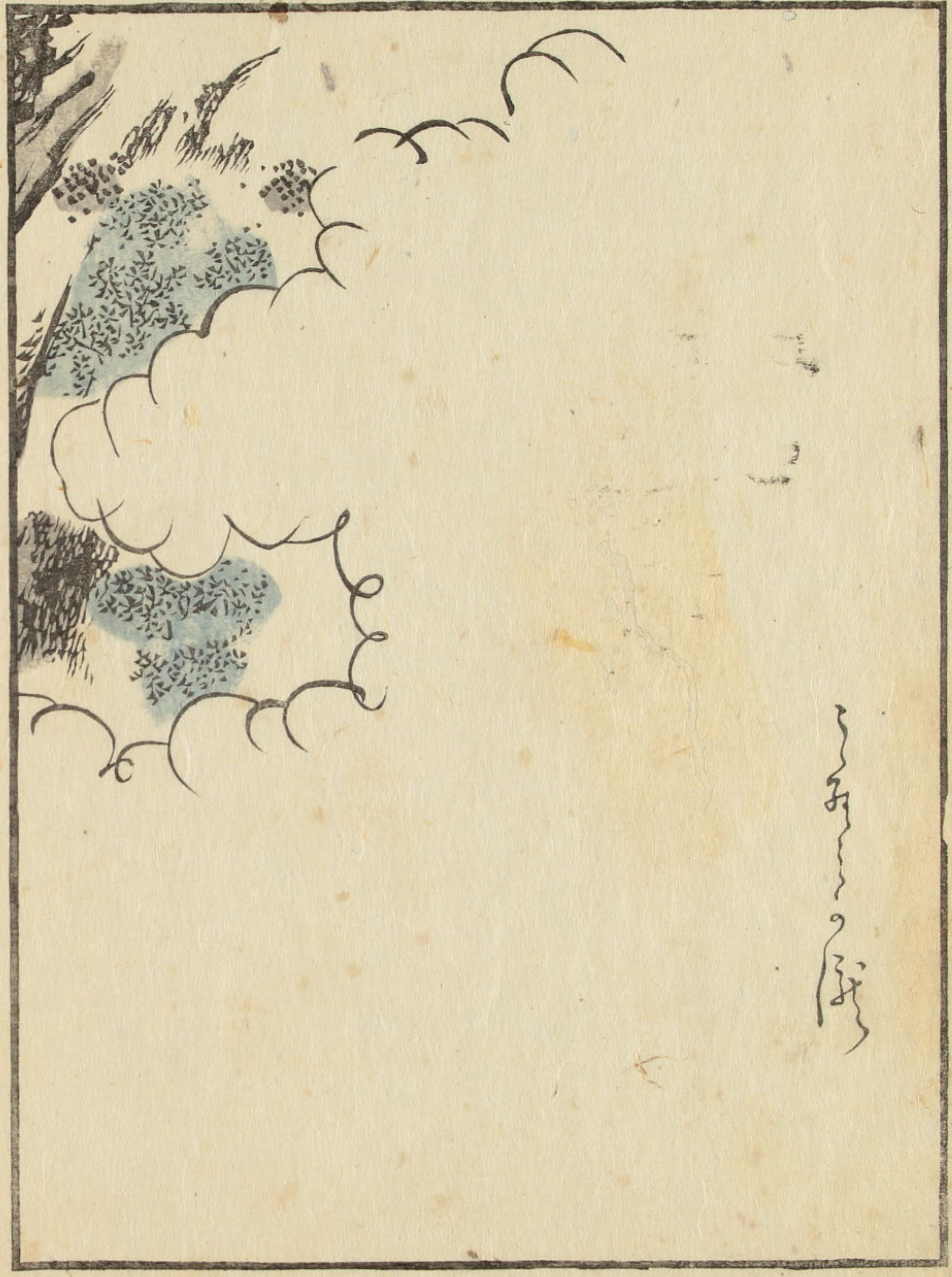
刺捨て愚候山々 衣 文 弓良

曾良八の合氏よりて惣て良と云ふり芭蕉の下系は
軒とまゝくくすの薪水の芳きたましくこのまゝ
一箇象沼の地共よせん事を候し且ハ羈旅の終をい
きくんと旅之覚悟を刺く愚深よつぬさこの物五
を改く宗悟とい仍く愚候山の句あり衣文の二
字カ何うてまゝゆ

廿餘町と云せ覚つて流る岩洞の頂より飛流して百尺
子岩の碧潭よ流る子岩窟より身をいそめ入る流の裏
よあふれはうらみの龍とや侍く侍るまゝ

瀬何ぞ流る流るや 友の 初

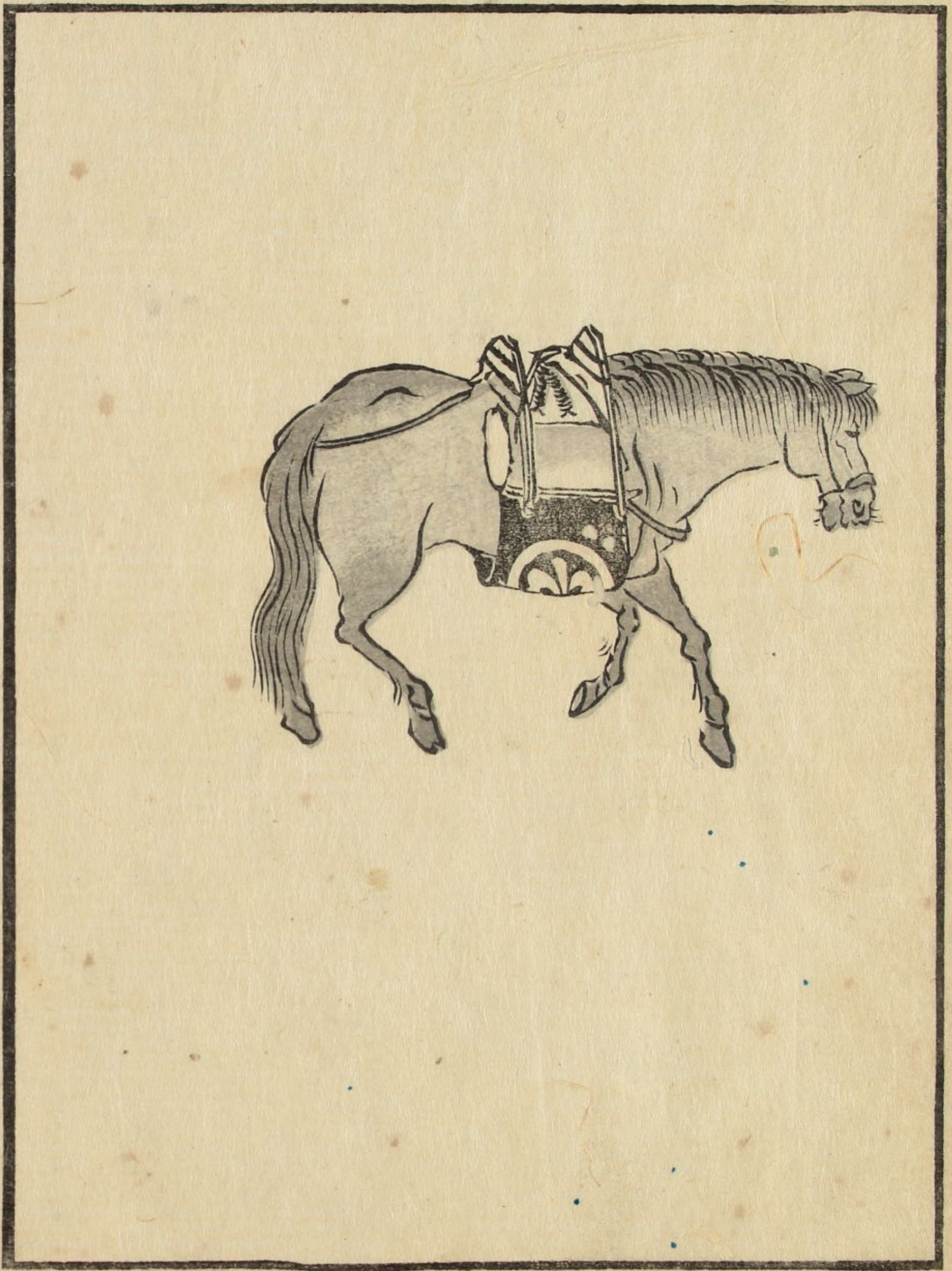
那頃の里をねと云ふは知人あれは是より野哉よか
ておろををゆくとんきよ一村を見分けしは西條
日暮る農夫の如く一巻をこりて明れハ又野中を
くくた野畑のさあけま川ぬのこよあけきよれハ時
とくともまゝのて情なきぬは飛きしつとくまやされ



朱文

馬をかくやれ馬

唐土





豊横の五丁よきうぬ 多れ 唐

むきうくや一雨たのめせ

と松の葉一しきよち付たつといつちやせいのあま
詠とんと雲岸もは杖を曳はんこもして共よいられ
いふき入たわくろのほとあさいきうあやも彼禁
あまのふたあさうきまてい谷るまきよれ松
く昔きうく卯月のま今程きう十景あるふ橋を
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
まこの流にこの流もやとたのふよらのまわ

石上の小菴光室よむまじのひきう妙禪師の和関法雲法
師の名室よまのくくく

木 啄も唐はちうく 夏木立

やとわひくぬいむをねみ侍一きう殺するよ
教代ふくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とくまきまきまきまきまきまきまきまき

野を撲くくくく幸むくくくく

殺生石ハ温泉のまのく陰よはく名の毒まきまき
くくく蜂蝶のまのくくまのまのくくくくく



庚午



丹心掃

此より又清い水あふる所の柳ハ昔此所の里にありて田の
畔より此所の郡守戸部某の此柳をせよとせよと
よの終りてそのまじつみのたにせよとせよと
此柳のつげよこそよきよきとせよ

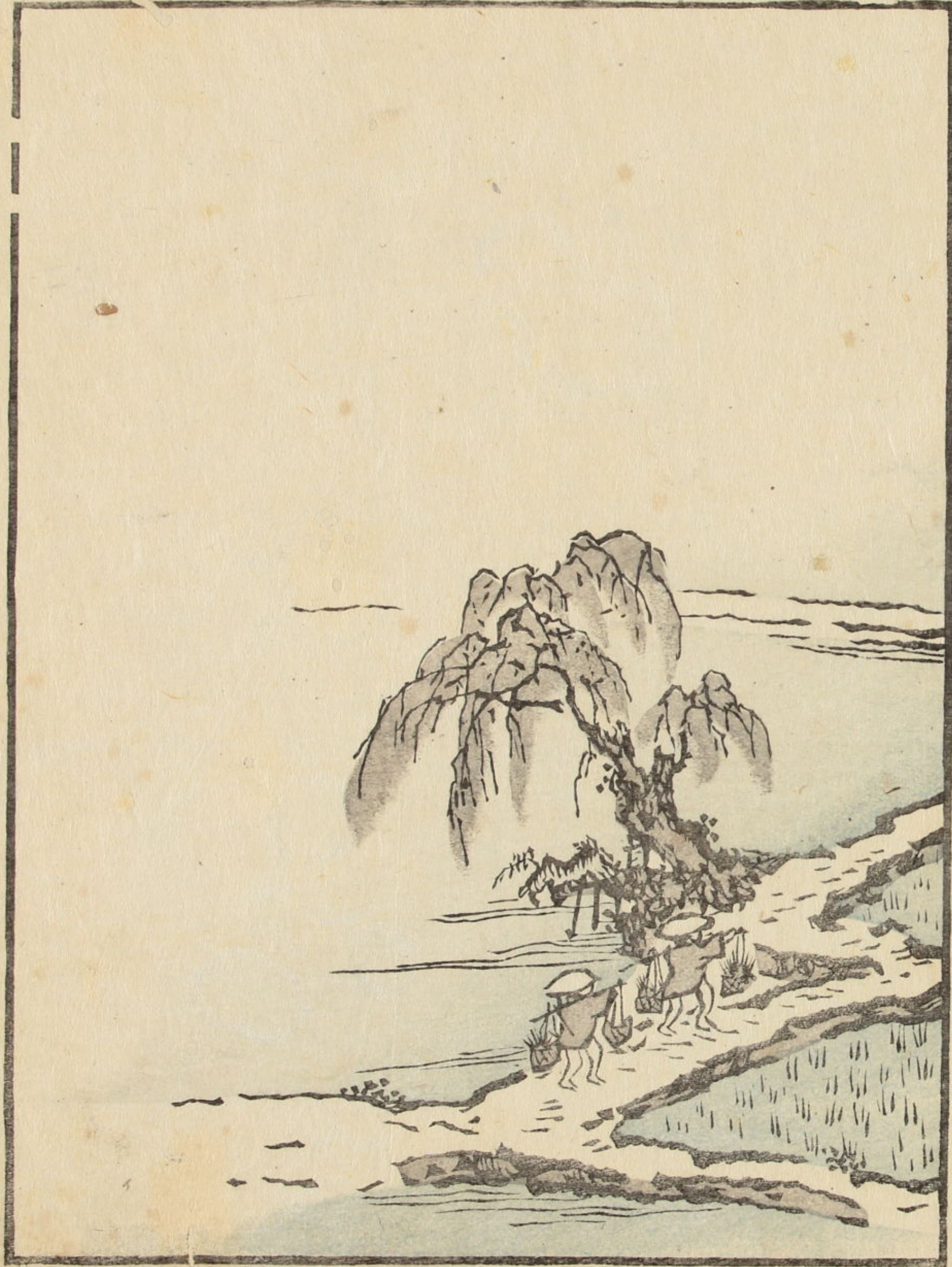
田一畝植てまき植柳の歌

此柳よまき口よりまきまきとて白川の関よりうりて様
は定りぬいとの歌へと使歌も路へ中よけ関を
三葉のうりて風障の人をせよとむ秋風を耳に
一にまきを植てまき植柳ありて世の

の白柳は秋の巻みまきとてまきまきとて
る古人の歌とて一にまきを植てまき植柳の歌と
よきよきとて

卯の巻をかき一に関の晴る歌 勇言

まきまきとて戦行まきとて一に関の晴る歌とて
根より右よ岩城相馬三春の庄常陸下野の地を
まきまきとてまきまきとてまきまきとて
て物敷うつてまきまきの川の驛は昔常陸より
てはまきまきとてまきまきの川の関はまきまきとて



十五



田
づ
か
い

奥の田植

秀堂







十一



—
うさぎ

夫

十一

夜に入ると雷雨雨志きりに降しくぬるよよわとら登
敷くもくばきく賊の持病をくおとつて消入る
よふん語をのそもやしく明か又旅をぬ行夜の名
孫のまじりまじりく業の難いおとさるの未
まのそくおと福を来さくといくと覇旅過去行
脚捨身無常の観念道路よきん天の命まると気
力取らんおと路後横よ踏ま伊草の大本戸をこみ鏡
摺白石の地をこき登橋の船よ入るい後中於東方の塚ハ
いづのわらんと人よいハ是よりきこたよんゆるい係

の里をいづのまじりく道徳神の社よんこの海今よ
あかたあゆははのあひあはるいあくあつたれ
んよあまのうらみちやうてこまに義海をあひあ月名の
おとつれくちや

あまのあまのいづのあまのあまの

あまのあまの

武隈のねよくおまをるは地ハまね根ハ土原よち三井に
ワのれて昔のあまのあまのあまのあまのあまの
おと昔むくのあまのあまのあまのあまのあまの川



香玉



飯塚の宿り

の檣杭もきりぬきし事なきに河もさよふや松はけし
もれーとみゆり代々あるに伐ありに極継ぎせー
かすは今將子威のささるのむしとまきとまき松
のーきまもんゆー

武隈の松もきりせし事檣と奉白と云
りの儻ふきとゆきぬ

檣より松を二木と二月紙

みね川を渡りて仙臺より入るやめりく日や寝宿と
めりてゆる通るゑのまよ畫工かき書くとまりのあり取

